

## 留学・研究計画書

|  |                                      |
|--|--------------------------------------|
| 氏 名 塩谷哲史   | 留学機関名<br>ウズベキスタン共和国<br>科学アカデミー東洋学研究所 |
| 留学先国名 ウズベキスタン  | 留学期間 西暦 2006 年 4 月 ~ 2008 年 3 月      |
| 研究テーマ (留学目的)<br>近代中央アジアにおける民族形成の歴史学的研究ーホラズム地方を中心にー   |                                      |
| 研究テーマ (留学目的) の説明 (テーマの学術的・社会的意義についても必ず記載してください)  |                                      |
| <p>ソ連の崩壊によって独立した中央アジア 5 カ国と日本との関係は、近年強まっている。2004 年 8 月の川口外相 (当時) による中央アジア歴訪を機に、一層緊密な関係構築が望まれるようになり、中央アジア側の日本に対する経済的期待も高まっている。しかし、タジキスタン内戦やイスラーム原理主義勢力の浸透に見られるように、この地域の政治的安定は必ずしも保障されていない。とくに民族をめぐる問題は、こうした政治的不安定の大きな要因である。申請者は、中央アジアの一地域であるホラズム地方の 19 世紀以降の状況に関して、民族の形成とその間の対立・融和について、現地史料に基づきながら一貫した研究を行ってきた。ホラズム地方では、16 世紀初頭に遊牧集団ウズベクが進出してヒヴァ・ハン国を建国し、次第に定住化する中、19 世紀初頭にその一部族によってコングラト朝が成立した。修士論文では、コングラト朝が盛んな灌漑事業により開拓地を拡大させる一方で、周辺地域への盛んな遠征活動を通して遊牧民、半遊牧民の諸集団をホラズム地方に定着させる徙民政策を行っていたこと、さらにそうした政策の結果、ウズベク人に加え、トルクメン人、カザフ人などをホラズム地方に定着させ、ロシアによる植民地支配のもとでの近代的な民族形成の基盤を築いたことを明らかにした。ホラズム地方における民族形成の特徴は、王朝による徙民政策と遊牧民の定住化にあった。</p> <p>しかし、これまでこうした点は世界的にも研究の対象とされてこなかった。その理由として、ソ連時代に外国の研究者が中央アジアに立ち入ることは困難であり、現地史料の収集、分析が事実上不可能であったこと、さらにソ連の研究者によって編纂された民族史は、マルクス主義的な歴史観によって定式化され、必ずしも実証的な研究の成果ではなかったことが挙げられる。加えて、ホラズム地方は、古来から独自の政治的・文化的風土を持つ地域でありながら、ソ連の成立以降ウズベキスタン共和国とトルクメニスタン共和国に分断され、一つの地域として研究の対象となることは稀であった。現在においても、この地域の歴史を専門とする研究者は、申請者を除くと世界ではほとんど皆無である。今後、いまだ歴史学的研究に用いられていない未公開の現地史料を駆使することによって、ホラズム地方の民族形成過程に生じた問題点及びそれが現在にまで及ぼす影響の具体相を解明していきたい。そして、そうした成果を中央アジアの他の地域、ひいてはアジア諸地域の民族問題と比較することによって、民族形成とその後の対立・融和の根源的な部分を解明していくことができよう。これら一連の研究の成果によって、日本と中央アジア諸国がより緊密な政治的・経済的関係を築く上で理解しなくてはならない中央アジアの民族問題の出発点と現在に至るまでの展開を、実証的な研究に基づきながら説明することで、国際交流の円滑な進展に多大な貢献をすることになる。</p> |                                      |

# 成果報告書

記入日 2008年8月6日

|   |                     |                       |
|---|---------------------|-----------------------|
| 氏名 塩谷哲史   | 留学先国名<br>ウズベキスタン共和国 | 所属機関<br>科学アカデミー東洋学研究所 |
| 研究テーマ：近代中央アジアにおける民族形成の歴史学的研究—ホラズム地方を中心に—  |                     |                       |
| 留学期間：2006年4月～2008年3月  |                     |                       |
| <p>1. 研究の方法と目的</p> <p>私の留学中の研究テーマは、近代中央アジア史の主要なテーマの一つである民族形成の問題を、歴史学の立場から、一地域に焦点を当てて検討することであった。対象となる地域として、ホラズム地方を選んだ。ホラズム地方はアム川下流域に広がるオアシス地域であり、中央アジア史で頻繁に取り上げられるマーワラーアンナフルやフェルガナといった地域とは異なる独自の政治権力、文化を有する歴史的地域である。それにもかかわらず、これまで実証研究が手薄なために、様々なテーマに関して他の地域との比較を可能にする材料が提供されていない。そのため、民族形成という切り口から、当地域に関する実証研究を積み重ねることが留学中の課題となった。具体的な作業は、近代移行期コングラト朝ヒヴァ・ハン国（1804-1920年）統治下のホラズム地方に関する、①未整理の史料群の収集、整理、分析、②史料にもとづいた政権の支配と各「民族」の動向の解明、に向けられた。</p> <p>2. 研究内容</p> <p>まず、第一に①の作業に着手した。ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所には、当該時期の宮廷で書かれた年代記の写本が所蔵されている。これらの史料を筆写することから留学中の研究生活が始まった。その後、同研究所およびウズベキスタン中央国立アルヒーフ、ヒヴァのイチャン・カラ博物館に分散して所蔵されている、おもにコングラト朝君主が発給したヤルリグ（勅令）を総合的に収集、整理、分析する作業に取り組んだ。さらに帰国前の数ヶ月は、中央国立アルヒーフにおいて膨大な文書史料の網羅的収集を行った。現在それらの分析を続けている。これらの研究活動は、各機関の研究員、学芸員の方々の協力の賜物であり、ここに謝意を表したい。また①の作業と並行して、②に関する個別テーマの検討を行った。コングラト朝政権が各「民族」集団に対して行った「徒民」ないし強制移住政策は、ホラズム地方における各「民族」集団と政治権力との関係、近代的な民族形成プロセスに与えた影響の大きさから、留学以前より注目し、取り組んできた課題であった。しかし、その政策の概要、意義を明らかにしつつあったが、限界や長期的スパンでの影響については、考察を深められずにいた。留学中の研究活動を通して、そうした考察を深めるとともに、さらに移住の対象となった「民族」史の視点から、コングラト朝政権の支配の意義を検討する、逆照射の作業も行った。また、政権と社会の紐帯となった聖者信仰の担い手たちの役割、20世紀初頭の政権や政治結社を主体とした近代化運動と各「民族」集団の有力者たちとの関わりについても、先行研究の批判的検討を通して、その一端を明らかにできた。</p> <p>3. 研究成果</p> <p>留学期間中には、所属の研究所より様々な機会が与えられたこと、また自ら積極的に研究成果を公表するよう努めたことにより、おもに口頭発表であったが、下記の成果を得ることができた。</p> <p>塩谷哲史「18-19世紀ヒヴァ・ハン国のヤルリグ研究に関する問題に寄せて」《ホラズム・マームーン・アカデミーとその世界科学発展における役割》、タシュケント、国立ティムール朝歴史博物館、2006年11月〔露語〕。</p> <p>塩谷哲史「ヒヴァ・ハンの徒民政策と新都市の出現」《ウズベキスタンの都市化過程：歴史と現代》、タシュケント、ウズベキスタン民族大学、2007年3月〔ウズベク語〕。</p> <p>塩谷哲史「ヒヴァ・ハン国における近代化過程（1910-1918年）」《ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所学術研究会》、タシュケント、同研究所、2007年4月〔ウズベク語〕。</p> <p>塩谷哲史「19-20世紀初頭ヒヴァ・ハン国におけるスーフィー活動家の役割」《中央アジアにおけるイスラームの価値：寛容性と人道性（歴史・哲学・文化的視点）》、タシュケント・イスラーム大学、2007年6月〔露語〕。</p> |                     |                       |

塩谷哲史「18世紀から20世紀初頭にかけての中央アジア南西部における「トルクメン化」過程」《ヨーロッパ中央アジア学会第10回大会》、アンカラ、中東工科大学、2007年9月〔英語〕。

口頭発表は、留学中の各作業を整理する上で有益であった。しかしそれ以上に、私自身の研究テーマ、研究姿勢、その各段階における成果を現地の研究者に提示することで、それらを理解してもらうことができたと思っている。また、情報や意見の交換を通して、新たな課題を発見し、研究上有益な着想を得ることができた。こうした学術交流が、現在の研究を続ける上で不可欠な人的ネットワークを築かせてくれたことも重要である。

#### 4. 今後の研究に向けての課題

おもに口頭発表でまとめた成果を、今後論文等の形で公表していくことが最大の課題である。また留学中に行った個別のテーマを、留学当初に掲げた研究テーマへとまとめあげ、完成へと導く地道な作業が必要となる。さらに研究活動と並行して、ウズベキスタンを含めた中央アジア諸国における様々な文化的活動（文学や映画制作など）の紹介を行う機会を見つけ、社会に還元できる活動を行っていきたい。

#### 【留学の印象】

私にとって、大学生生活も半ばにさしかかるまで、中央アジアの国々の具体的なイメージは何一つと言ってもよいほどなかった。ただ「アジア」の歴史を知り、「アジア」に住まう人々が作り出した社会のあり方を様々な方法で論じられるようになりたい、そうした思いがあった。幸いにも出会いが重なり、大学生生活も後半からは、中央アジア、ことにウズベキスタンとトルクメニスタンにまたがるオアシス地域であるホラズム地方の歴史に触れ、興味を抱き、その研究に取り組んできた。とくに、なぜ一つの歴史的な地域が国境線によって分断されているのか、という問いから、中央アジアにおいて地域や人間集団はいかなる要素によって構成され、それらが近代的な「民族国家」編製の過程で変化していったのか、という問いへと関心は膨んでいった。

しかしそうした歴史に対する関心はあるにせよ、私が描いていた現代の中央アジアについてのイメージは、極めてあやふやなものであった。

留学の機会に恵まれ、生活を始めて、少しずつ具体的なイメージが形作られ始めた。そこで最も大きかったのは、人との出会いである。ウズベキスタンの人たちは、客人をもてなすことでは、人後におちない。そこでは、豪華な宴席とにぎやかな雰囲気驚かされるのである。しかし、友人の家に客人としてではなく訪問すれば、そこではとても質素な食事と、テレビを見ながら一家で談笑する一幕に出会うことになる。日本にはハレとケという言葉があるが、まさにウズベキスタンの「ハレ」と「ケ」を見ることができた。そして「ケ」のとき、彼らの生活は、日本人である私にとってそれほど距離を感じるものではなかったのである。

私が研究対象としているホラズム地方は、首都のタシュケントから西に約1000キロ離れている。飛行機を使えば1時間の行程であるが、私は好んで鉄道を使った。夜行で18時間。なぜ鉄道を選んだのか。それは、鉄道の車両という空間で、ホラズムの町々からタシュケントへ買い出しに、通院に、親戚をたずねに行く人たちと出会え、彼らとまさに生活の本音を語ることができたからである。決して経済的には豊かではないホラズム地方への「郷土愛」や、環境の問題、出稼ぎと家族の問題などについて一晩かけて語り明かしたことは貴重な経験となった。何より、彼らと問題を共有し、もしできうるならば自分の研究に活かしていきたい、そう強く感じられた瞬間であった。

研究生活のみならず、友人の家でのタバや、車内での語らいを通して、研究を初めてから爬行を繰り返しつつ描かれてきた私自身の持つ中央アジアのイメージが、はっきりとした輪郭を見せ始めたのである。そして現在の中央アジアに生きる人々の視点に少しでも近づきながら、その過去を眺められるようになってきた。それだけ留学によって現地に滞在した経験は大きかったといえる。

最後になりましたが、ウズベキスタンでの実りある2年間の留学機会を与えてくださった松下国際財団、および留学中も私のよちよち歩きの生活について温かく見守ってくださった財団のスタッフの皆様にご心よりの感謝を申し上げます。今後とも自らの研究に真摯であるとともに、海外との交流促進、相互理解の増進に寄与できる人材として、精進を重ねていきたいと思っております。